東京ジャーミイ金曜日のホタバ
2006 年 4 月 7 日

世界に慈悲として遣わされた預言者ムハンマド

親愛なるムスリムの皆様。私たちの愛する預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）がこの世に生まれてくる以前は、人々は大切な判断力を失い、道に迷った状態でした。憎悪やシルク（アッラーに他の何かを同等に配すること）は人々の心を暗くし、不正が生活のあらゆる場面にはびこっていました。社会生活は破綻し、道徳は力を失っていました。親戚の結びつきは絶え、隣人の権利は無視されました。女性に対しては人間らしい振舞いがなされず、抑圧者が哀れな者たちを苦しめ、その労働に対価を与えていませんでした。

親愛なる兄弟姉妹の皆様。預言者ムハンマドは、このように闇が深くなった時代、この世界に名誉を与えたのです。逸脱、偶像崇拝、偽りによって暗くなっていた人々の心は、クルアーンの光によって照らされました。人々に、アッラーへのしもべとして振舞うことが呼びかけられ、この呼びかけに耳を貸す者には、正しいことを話すこと、信託を守ること、親戚の結びつきを守ること、隣人とよくつきあうこと、流血を避けることが教えられました。姦淫を犯すこと、嘘をつくこと、孤児の財産を略奪すること、不正な利益を得ること、潔癖である人々を中傷することから遠ざかることが命じられました。預言者は、人々に礼拝し、断食し、ザカートを払い、善を施し、個人的、社会的責任を果たすことを伝えました。なぜなら彼はクルアーンの言葉を借りるなら「万有への慈悲として」（預言者章第 117 節）遣わされたからです。偶像崇拝者たちにのろいの祈りを行なうことを提案した人々に対し、預言者ムハンマドは「私は、のろう者としてではなく、慈悲として遣わされたのだ。」と応えられたのでした。

ムスリムの皆様。子どもたちに慈しみといたわりを示すことを望まれ、子どもたちにキスをされた時、ある者が「アッラーの使徒よ、子どもたちに口付けをなさるのですか。私はそれをしたことがありません。」といったのに対し、預言者は「アッラーがあなたの心から慈しみといたわりを取り除かれたのであれば、私に何ができるだろう。」とおっしゃられ、その者に注意を与えられました。戦いの際、数人の子どもが衝突に巻き込まれて死んだことを聞かれ、非常に悲しまれました。「アッラーの使徒よ、あなたはなぜ悲しまれるのですか。彼らは偶像崇拝者の子どもたちです。」といった者に対し、警告を含んだ次の返事をなさいました。「この子達は偶像崇拝者の子であっても、ムスリムである。注意しなさい、子どもたちを殺さないように。人間は清らかな天性と共に創造されるのだ。」

同じように、両親、女性、老人に対してもよく振舞うことを命じられました。人が信者の兄弟に微笑を向けることすらサダカであることを明らかにされました。これらのことはすべて、この崇高な預言者が慈悲として遣わされたことを示すものです。

親愛なるムスリムの皆様。預言者ムハンマドが「万有への慈悲」であられることは、ただ人間たちにのみ該当することではありません。全ての命あるものを包括しているのです。あるハディースでは、「アッラーは慈悲深く振舞う者に、慈悲深く振舞われる。だからあなた方も、この地上に存在するものたちに対し慈悲深くありなさい。天に存在するお方も、あなた方に慈悲深くあられるだろう。」とおっしゃられ、全ての被造物に対し慈悲深く振舞うことを求められました。他のハディースでは、「その権利もなく、スズメであっても生き物を殺す者へ、アッラーは審判の日、問われるだろう。」とおっしゃっておられます。ある時は、空腹で腹が背にくっつくほどになり、ぐったりとなっているラクダをご覧になり、「放すことのできないこの動物について、アッラーを畏れなさい。」といわれ、ラクダの持ち主に警告を与えられました。だから、私たちも愛する預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）のように、家族、子どもたち、隣人たち、親戚たち、全ての人たち、全ての生命あるものに対し、慈悲をもたらす存在となりましょう。手で、言葉で、仕事で、活動で、周囲の人たちにとって役に立つ者となり、信頼や安らぎ、幸福を与えましょう。